

平成29年9月21日開催

仏教とアルコール

川野泰周

(臨済宗建長寺派林香寺 住職/RESM 新横浜睡眠・呼吸メディカルケアクリニック 副院長)

1. はじめに

仏教におけるアルコールの位置づけを考える時、我が国の特殊性に目を向けることが必要となる。世界の多くの仏教国において、飲酒は戒律において厳禁とされており、今も出家（僧侶）の身分にある者は飲酒することを認められていない。しかしながら日本においては、僧侶の多くは葬儀や法事の後に「通夜振る舞い」や「精進落とし」といった場に檀信徒とともに同席し、料理とともに酒を嗜んでいる。本稿では、こうした我が国の仏教の独自性がどのような経緯で生まれ、今に至るのかを知ることで、人とアルコールの在り方について論考する。

2. 世界の宗教とアルコール

世界の主たる宗教において、酒が常に重要な存在であったことは自明である。紀元前3千年から千年頃の原始宗教においてすでに、「神」「酒」「唄」「踊り」の4要素は宗教儀礼における必須のものであった。それらの宗教において酒は、「命の水」「神の使い」「魔力を有する」ないしは「精霊の偉力を感得するためのもの」と位置づけられた。ギリシア神話に「バックス酒神」が登場することからも、酒を神格化するスタイルが自然であった。

キリスト教では旧約聖書に、ノアが農夫となり葡萄樹を植え、葡萄酒を飲んで不始末をした挿話が登場し、飲酒して乱れることを不道徳として扱う側面が見られる一方、「なんじら皆この酒杯より飲め。これは契約のわが血なり」（マタイ伝福音書二十六章より抜粋）と、酒を神聖なものとする捉え方もまた、色濃く存在した。儒教では、地方の政治的指導者が識者を招いて酒宴を開く「郷飲酒礼」のしきたりを重んじた。これはただ集まって飲酒するのみにあらず、年長者や両親を敬い、助け合いの精神を育むという儒教的思想に基づいた儀礼であった。

3. 初期仏教とアルコール

今よりおよそ 2500 年前に、ガウタマ・シッダールタが修行の末に悟りを得て「ブッダ」（「悟った人」の意）となったことに端を発する仏教において、酒の在り方、扱い方は時代を経てドラスティックに変遷してきたといえよう。ブッダとその弟子たちによって構築された初期仏教（原始仏教）の時代の書物「パーリ律蔵」に、サーガタという一人の弟子の物語が記録されている。彼はある村を荒らす龍を退治することで一躍勇者となるが、村人から供養された酒に泥酔して醜態をさらし、これを機にブッダは禁酒を戒律とする「不飲酒戒」^{おんじゆ}を取り決めたとされる。ただし、薬用として酒を飲むことは認められていたことが、「舍利弗問經」^{しやりほつもんきやう}の中に明記されている。

紀元前後の時代には、それまで出家者（修行者）の精神性を高めるところに主眼を置いた初期仏教から派生した、広く在家（出家者ではない一般の人々）の救済を教義の一つに置いた「大乘仏教」が誕生し、その後中国を経て日本に伝来することとなった。この大乘仏教の初期經典である楞伽經^{りやうがきやう}には、「^{まさ}一切の肉と葱と韭と及び酒とはこれを飲食すべからず」とあり、僧侶は酒と五辛（ニラ・ネギ・ニンニク・ラッキョウ・ショウガ）とを摂取してはならないことが明記されている。この原則は現代日本においては禅の修行道場（僧堂）の規矩（規則）^{きく}に残されており、今も雲水（僧堂の修行僧）は正式な食事においてこれらを摂ることが許されていない。（筆者も 3 年半の間、雲水生活に身を置きこれを実践した）

4. 日本の仏教とアルコール

紀元 6 世紀（飛鳥時代）に日本に伝来した仏教は、その後時代の変遷とともに酒に対するスタンスを変えていった。奈良時代までは厳しく禁じる立場をとっていたものの、平安時代になるとその様相は一変。多くの僧侶は飲酒をし、法要の際にも酒が供される習慣が始まったとされる。その背景には、平安時代当時に蔓延していた末法思想（仏の教えも、それを実践する修行者もない時代が来るという考え）や、神仏混合の氣運の高まりが大きく影響したと考えられる。

鎌倉時代にはこの末法を正法に回帰せしめんとする禅（臨済宗と曹洞宗）が日本に伝えられ、不飲酒^{ふおんじゆ}の戒律を遵守する一潮流が興った。日本の臨済宗の開祖栄西は、酒に代わるものとして宋から茶を持ち帰り、その効能を説いた「喫茶養生記」をしたためて、日本の茶の湯文化の礎を築いたことで知られる。しかし一方で、同時代に禅宗以外の新しい宗派を開いた指導者たちは、飲酒に対

して寛容な立場を示した。日蓮宗の開祖日蓮、浄土宗の開祖法然、浄土真宗の開祖親鸞が代表例であり、例えば日蓮は「タダ女房と酒うちのみて、『南無妙法蓮華経』ととなえ給え」という言葉を遺している。さらに室町時代、江戸時代と下る中で、日本の仏教は次第に「修行と救済の宗教」から「吊いの宗教」へとその主たる役割を変えてゆくこととなった。とりわけ江戸時代においてはキリシタン禁制の国家指針もあって仏教は国教としての地位を確固たるものとし、諸大名は財力を駆使して菩提寺を建立することに勤しんだ。葬祭と法要を司る僧侶の役割が大きくなるにつれ、酒も自然に用いられることとなった。

5. 現代の日本仏教における飲酒観

近代以降の我が国においては、仏教や僧侶と酒の在り方はより緊密なものとなり、例えば現代においても「通夜振る舞い」「精進落とし」の席に導師を務めた僧侶が呼ばれ、飲酒をすることで、「檀家を大事にする和尚さん」として歓迎されるのは常となっている。この間、少数の排酒派の僧侶が禁酒を主張する動きもあったが、いずれも主流をなすことはなかった。この背景には日本人の宗教観が大きく影響していると筆者は考える。アジア南方に伝わった上座部（小乗）仏教のように、俗人と出家者を明確に区別して出家者の神聖性を讃える仏教とは異なり、アジア北方、とりわけ日本の大乘仏教においては、地域コミュニティの中で人々と寺院、僧侶が近しき存在であり続けてきた。寺子屋に子供たちが集まり学んだ江戸時代から、学校の放課後に寺院の境内で子供たちが遊んだ昭和時代まで、寺や神社といった宗教施設は地域とともに存在した。ところが平成の現代において寺院は、檀家減少や跡継ぎ問題といった、その存続自体を危うくさせる諸問題を前に、次第に地域交流の場を閉ざしつつある。また核家族化による生活単位の縮小化や、ごく一部の過激な宗教団体による重大事件などによる負のスティグマが、地域の人々を寺社から離れせしめている。

筆者が日本の仏教とアルコールの関係性の変遷を俯瞰して思うのは、日本における民衆にとっての仏教の在り方が、時の流れとともに変わりゆく様をまさに反映してきたのであろうということである。「寺離れ」が急速に進む近年において、宗教者はただの寺院施設管理人に甘んずることなく、ブツダの時代から形は変われど受け継がれてきた「慈悲の精神」を、それぞれの言葉と行動で示してゆくことが肝要であり、それは日本の仏教者が飲酒することをどう扱うかということに優先する、喫緊の命題であると筆者は考える。